



# 有明海と筑後川の歴史と文化



大矢野栄次  
Ohyano Eiji

低平地研究会経済専門部会  
久留米大学教授

## I. はじめに

「川と海は繋がっている」とよく言われる。水が流れるという意味で繋がっているのは当然である。しかし、それ以上に生態系として、あるいは人々の生活の営みとして海と川は繋がっているのである。

鮎は河口の大川から城島の地域の吃水域で産卵しすぐに遡上を開始する。生まれてすぐの鮎は一瞬の間、塩水に浸されることが大事であるそうである。稚魚は満ち潮に押されながら筑後川を遡上する。流れの緩やかな下流域から久留米・北野を越えて、次第に体調が大きくなるに従ってより流れが速くなる中流域に向かって遡上する。田主丸から浮羽・吉井の地域から夜明<sup>1</sup>を越えて、日田の三隈川に入るのである。そして、より大きくなった鮎は、玖珠川か大山川に入り、より上流の岩場の激流の水域に入って生活圏を獲得するのである。鮎はより多くの珪藻が付いた岩場を求めて縄張り争いをするのである。強い鮎はより大きくなり、大きい鮎はより強くなるのである。これが大山川の響き渓谷の「響き鮎」である。かつて重さ1斤、長さ40センチメートル程の尺鮎がいたのである。強くたくましくなった鮎は産卵の場を求めて大山川を下り、日田の三隈川を通過して、筑後川の河口の城島・大川地域を目指すのである。

本論はこの筑後川と有明海の自然史との関係での若干の社会史の問題について考察する。

## II. 有明海の後退＝筑後川の伸長

### 《淡水；アオ》

2000年前頃の有明海は、図1のように現在の久留米市の宮の陣や小郡市の所まで海が広がって

たと考えられている。これを「古代有明海」と呼ぶことができるであろう。当時の古代有明海の奥部は吃水域<sup>2</sup>であり、淡水の海であったと考えられる<sup>3</sup>。筑後川周辺の人々は、この淡水の水を「アオ」と呼んでいる。今日の有明海においても満潮時の上水は淡水（アオ）である。

干潟の滲筋が川の形で残ったものが干潮時には川も干上がるのである。この江湖こそが、佐賀平野の天然の排水路としての役割を担ってきたのである。佐賀江は、この淡水（アオ）の主要な取水河川として、その南に位置する広大な水田を潤してきた。その淡水の貯水池として、用水路として、また排水路として機能してきたのが、この地独特の水利施設が堀（クリーク）である。

西から東へ流れ、巨勢川、城原川、中地江等の河川を集めて筑後川へ流れている佐賀江は、近年まで、佐賀市と筑後川を結ぶ運河として物資輸送の大動脈の役割も果たしてきたのである。そして、水源を持たぬ川・佐賀江には、この川から水田へと大量の水を取水したのである。

### 《古代有明海》

古代有明海が次第に後退して、現在の有明海となった原因は、九州島の自然陸化と阿蘇の火山活動による噴火と筑後川が台風や大水のときにもたらした土石流が堆積していった沖積平野の拡大過程の反対側の結果である。すなわち、この有明海の後退に従って筑後川が延伸したのである。大川とは多い川の意味であり、古代有明海の後退とともに潮の引いたところに小さな川が沢山生まれて多川、大川と呼ばれるようになったのであろう。多くの小さな洲が上流から流れてきた土砂に埋も

1 現在は夜明けダムがアユの遡上を不可能にしている。

2 河川・湖沼あるいは沿海などの水域のうち汽水が占める区域である。漢字の「汽」は「水気を帯びた」という意味を含蓄し、「汽水」は淡水と海水が混在した状態の液体を指す用語である。一般には川が海に淡水を注ぎ入れている河口部がこれにあたる。

3 「淡海＝近江」とい意味の始まりである。

れながら、あるいは人口的に干拓されながら、一本の大きな流れが筑後川として残ったのであろう。

阿蘇山の噴火による火山灰は筑後川に流れ込んで有明海に出て堆積した。この黒い火山灰が有明海の満ち潮とともに海岸線に打ち上げられて堆積し、その上に川からの砂が流れ込んで火山灰の上に堆積したのが有明海の黒い干潟である。このような過程が数千年と繰り返すうちに有明海独特の遠浅の黒い海岸線<sup>4</sup>が形成され、このような環境のもとに、ムツゴロウやワラスボなどの多様な有明海独特の魚が生息する豊かな海が生まれたのである。



図1 古代有明海（現在よりも陸が-9mの図）

### 《古代有明海と古代の歴史》

古代において大陸から日本に移住してこの古代有明海周辺域に定住するようになった人々とは、秦の始皇帝の時代に蓬莱国を求めて老若男女3000人が渡来した除福（BC278 - 208）伝説の時代である。彼らは、古代有明海から筑後川流域に侵入して、やがて一部の人たちは豊の国を建設したと考えられている。

4世紀前後の神功皇后伝説の時代には、大川榎津に上陸した神功皇后と武内宿禰の一軍は、大川周辺から大善寺周辺域に生活の場を得て、やがて、筑後の田油津姫を退治して、この有明海周辺を支配したのである。やがて、応神天皇や仁徳天皇の時代には筑後川を遡上して、大筑紫平野を支配する豪族となっていくたのである。

筑後川流域において生活を始めた「帰化人」たちは、「津留」に住み始めて農業と漁業を行って生活の場を拡大していくたのである。

### 1. 水田と津留

有明海の後退から次第に筑後川が生まれた、この地域の水田は、筑後川の河口の周辺の小さな洲に満潮時の上水である淡水を貯めて引き潮のときに淡水が漏れないように土上げした土地を造り稲作がおこなわれた。このようにして得られた淡水（アオ）を利用して稲作を行ったのである。このような技術を「アオ取水」といい、吉野ヶ里遺跡で確認されている農耕技術である。

日本の稲作は、本来、山の湧き水を利用しておこなわれてきた。これが水田である。かつては水縄と呼ばれた耳納連山の湧水を利用して耳納山の麓一帯が水田であったと考えられているのである<sup>5</sup>。このような山の湧水を利用する水田に対して、有明海の干満の差を利用して得られる淡水を河口の洲に取り入れて造られた稲作地のことを筑後弁では「津留」と呼ぶのである。津留とは水流とか鶴とも書き九州の各地に広がる地名でもある。「ツル（津留、水流、鶴）」という地名があるところはたとえ山の中であっても水田地帯なのである。

### 2. 堰と用水路

江戸時代前までは、川の水を汲み上げて灌漑設備を造り水田を増やすという水車<sup>6</sup>の技術が普及していなかったために筑後川の中流域においては水田を造ることができなかった。そのため、筑後川の稲作地帯とそれ故に古代の稲作文化は、山の麓と川口のそばに開けてきたのである。

江戸時代以降は、大規模な公共工事としての堰づくりや用水工事を行う経済力と技術力がついたためにこれまで河川の水を利用できない地域に川の水を利用できるようになり水田地帯の範囲が拡大した。そして、水車などの揚水技術の普及によって水田地域はさらに拡大したのである。

筑後川の代表的な堰と用水には、上流から袋野堰と袋野用水（筑後川左岸）、大石堰と大石用水（筑後川左岸）、山田堰と堀川用水（筑後川右岸）、恵利堰と床島用水（筑後川右岸）がある。

河川から一時的に借用された水は三尺下流で元の川に戻されるのが原則であったのである。化学肥料や化学農薬を使用しない水田を通過した水は川の流れの中で直に微生物や水中の動植物によって浄化されたのである。

4 宮崎康平氏は、『幻の邪馬台国』において、この黒い海岸に長く住んだ人々が玄界灘の白い海岸線の一部を征服したときに「しらひわけ（白い干潟の国）」という名を付けたのであると説明している。

5 阿蘇山の産山の周辺の湧水による稲作地帯も同様に古い時代からの水田であるだろう。

6 「日本書紀」（720）には、推古天皇18年（610）の頃に水力を利用した臼があったと記録されている。

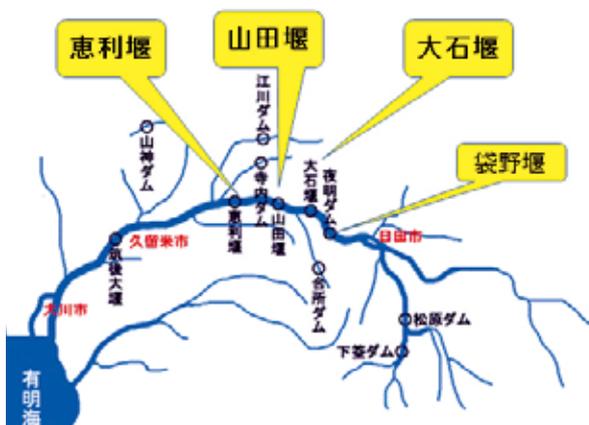


図2 堰と用水による水田開発

江戸時代の堰や用水の建造は、筏の流れを前提とした構造であり、鮎や鰻が遡上できる川幅と流量を確保することを目的にしながらも、水田に水を引き込むための工事が行われたのである。それ故に堰や用水の工事によっても既存の河川の流量には急激な減少は無く、水質も劣化しなかったと考えられるのである。

#### 《舟運》

筑後川は、舟運によって日田から大川まで、荷物が輸送されていた。また、日田の三隈川で筏を組んで流した。初期には竹の筏、後期には杉の木の筏を組んで河口の大川に運ばれた。三隈川のさらに上流の大山川では筏ではなく、丸太をそのままばらばらに流して、竹竿一本で丸太の上を飛び回りながら、丸太が岩にぶつからないように日田まで流す仕事があったのである。

#### 《川の水質》

このように江戸時代の堰の建設には、筏の流れや鮎・鰻が遡上できる川幅と水の流量を確保することを目的にしながら工事が行われた。それ故に堰の建設によって水量が急激に減少することは無く、川の水質も劣化しなかったのである。

川から水田へと一時的に借用された水は、化学肥料や化学農薬を使用しない水田を通過した水は元の川の流れの中に戻されて、また浄化されながら下流域へと流れて行ったのである。川の水質を低下させたのは水の流れを止めたダムと堰であり、農薬であり、化学肥料である。その結果、鮎と鰻が川を遡上できなくなって川から駆逐されてしまっているのだ。

#### 《近代技術と筑後川》

明治以降の近代化は、より近代的な技術によって公共事業を行い、堤防を高くして川幅を狭めて

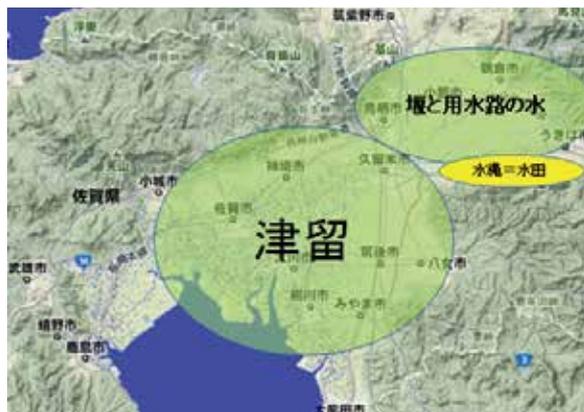


図3 江戸期になると中流域に水田が広がった

農地を確保して水田の面積を拡大した。河川をショート・カットしながら、洪水被害の低減を図りながら、下流域の河口においてさえも堰を高くして、大潮時の高潮の塩水を避けながら、淡水を確保して水田が増加した。しかし、筏が流れて、鮎や鰻が遡上できるように川の流れは確保されて来た。

昭和の時代に川の上流にダムを造り、川の途中に鮎が遡上できないような堰を造って、川の流れを止め水量を大幅に減少させたのである。都市の周辺では溜め池を潰して住宅地を確保し、やがて地下水が枯れてしまった福岡都市部は遠く流域を越えて筑後川から水を送るようになったのである。しかし、大雨のときはダムを護るために川に大量の水を流すために洪水を引き起こすことになるのである。

#### 《戦後の技術》

都市の周辺の溜め池を潰して住宅地を確保し、地下水が枯れてしまった都市部は遠く流域を越えて水を送るようになったのである。そこで、戦後のダムや堤防、堰の工事においては、川の上流にダムを造り、川の途中に堰を造り、バイパスを造って、川の流量を減らしてしまったのである。そのため、筏が流れない、舟運ができない川となってしまう、当然のように鮎が遡上できない川となったのである。

このようにして造られたダムと堰が川の流れを止め水量を大幅に減少させたのである。しかし、大雨のときはダムを護るために川に大量の水を流すために洪水を引き起こすことになるのである。

川の水質を低下させたのは水の流れを止めたダムと堰である。その結果、1000万匹以上いたと考えられる鮎とその程度に見合った数の鰻が、筑後川を遡上できなくなってしまったのである。鮎や鰻が川から駆逐されていなくなってしまったので

ある。その直接の原因は、夜明けダムであり、鮎の稚魚には落差が大きすぎる筑後大堰の魚道なのである。

### Ⅲ. 有明海の囲い込み漁と神籠石

有明海の潮の干満の差は大きく干満の差は6メートルから7メートルと考えられている。「大潮」の原因は、太陽と月の位置が地球と一直線になった時であり、太陽と月の地球に対する引力が合わさったときに生じる現象である。これは満月と新月の時に表れる現象である。「小潮」の状態は、太陽と月が地球を頂点として直角の方向に並んだときに生じる現象であり、太陽と月の地球に対する引力が打ち消し合うのである。

#### 《囲い込み漁》

海岸で引き潮の様子を見ていると、瞬間に今まで足元まであった潮水が数十メートル先まで引いて黒い砂浜が現れて陸に変わるのである。蟹やムツゴロウ、ワラスボは砂浜の上を歩き回り、逃げ遅れた魚が時々跳ねている様子が見られる。

昔の人はこの有明海の海岸の引き潮の様子から「囲い込み漁」を考え出したのであろう。「囲い込み漁」とは、海岸に直径10メートル程度の穴を掘り、周囲に大きな石を巡らせるという簡単な造作物である。海側には石を置かないで潮の出入りを自由にしておく。満ち潮の時に潮と共に魚が入り込む。この石のサークルは生け簀になるのである。やがて多くの魚が集まった頃には引き潮が始まり、瞬間に潮が退いていくと魚はこの生け簀から逃げ遅れてしまい、潮が完全に退いたあと人が手掴みで逃げ遅れた魚を採るのである有明海の干満の差を熟知した他に何の道具も要しない自然を熟知した漁の方法である。

#### 《神籠石の話》

この「囲い込み漁」をヒントにして、宮崎康平氏は「神籠石」の説明を行っている。「神籠石」とは、有明海周辺域の山々に築かれた列石のことである。

福岡県では、「女山神籠石」(福岡県山門郡瀬高町大草字女山)、高良山神籠石(福岡県久留米市御井町高良山)、雷山神籠石(福岡県前原市雷山)、鹿毛馬神籠石(福岡県飯塚市鹿毛馬)、御所ヶ谷神籠石(福岡県行橋市津積・みやこ町勝山大久保・犀川木山)、杷木神籠石(福岡県朝倉市林田・穂坂)、

唐原神籠石(唐原山城;福岡県築上郡上毛町下唐原・土佐井)、阿志岐城(旧名:宮地岳古代山城;福岡県筑紫野市阿志岐1999年発見(蘆城か))があり、佐賀県には、おつぼ山神籠石(佐賀県武雄市橘町小野原国指定史跡)、帯隈山神籠石(佐賀県佐賀市久保泉町川久保町・神埼町 西郷国指定史跡)がある。

そして、山口県 以東では、石城山神籠石(山口県光市石城)、鬼城山城(鬼ノ城)(岡山県総社市奥坂・黒尾)、大廻小廻山城(岡山県岡山市草ヶ部)、永納山城(愛媛県西条市楠)、讃岐城山城(香川県坂出市西庄町・府中町・川津町、飯山町)、播磨城山城(兵庫県たつの市新宮町馬立・揖西町中垣内)などがある。

宮崎康平氏は著書『幻の邪馬台国』で「神籠石」は猪垣であるという。上に挙げた地域以外では「神籠石」が存在しないが猪垣はある。全国の山あいには猪垣と猪穴が多く存在するのである。しかし、逆に、上に挙げた地域には「神籠石」は存在するが猪垣は無い。すなわち、有明海の「囲い込み漁」の列石の手法がきめの細かい「神籠石」の列石の技術となったのであるという説明である。しかも、水路の役割も果たしうるのである。

では何のために「神籠石」が建設されたのかというと、猪の毛皮や胃袋を採って鞆(ふいご)を造るためであると説明する。すなわち、多々良(踏鞆製鉄)<sup>7</sup>の道具であると説明するのである。

### Ⅳ. 水田開発と河川の水利開発から技術が生まれる

筑後川河口の大川は、筏が集まる木材の集積地であり、舟運から海運に荷物を積み替える港でもあった。それ故に大川は船大工の町であり、木材加工の町となった。木材は水車や脱穀機のような農機具となる。水車の利用は川の水をより利用可能として良田を増加させ、脱穀機は稲作の作業効率がより良くして筑後一帯を豊かな穀倉地帯となることに貢献したのである。山の麓の川の落差を利用した水車は精米場所となり、米や小麦の加工技術を高めた。

#### 《農閑期の仕事》

水田開発による稲作文化の普及は、麴の利用により、味噌づくり、醤油づくり、漬物づくり、酢づくり、酒づくりとなって食彩を豊かにし、農閑

7 踏鞆製鉄(「鑪(たたら)せいてつ」(tatara iron making method)とは、初期の製鉄法である。製鉄反応に必要な空気をおくりこむ送風装置の鞆が踏鞆(たたら)と呼ばれていたことからつけられた名称である。日本列島においては、この方法で砂鉄・岩鉄・餅鉄を原料にして、和鉄や和銑が製造された。こうして製造された鉄や銑は大鍛冶と呼ばれる鍛錬によって脱炭された。

期の紡織・機織り文化を育成した。また、農閑期の仕事として藍染の餅が生産され、流域に植えられた桑畑によって、蚕が買われて、紡績や紡織・機織りが盛んとなり、絹（シルク）の産地となったのである。

### 《農業から生まれた技術》

筑後川沿いの農村地帯は、稲作だけではなく農作業の効率性を高めるためにいろいろと工夫が行われ地域でもあった。幕末に京・大阪で「からくり儀右衛門」と呼ばれて有名になった田中久重（寛政11年9月18日（1799年）－明治14年（1881年）1月11日）は久留米餅の機織り機を発明し、いろいろな絡繰りを作って「東洋のエジソン」とよばれた、日本を代表する発明家である。彼は技術力を佐賀藩にかわれて、幕末の佐賀において蒸気機関やいろいろな近代的な機会を発明し、明治には

いて田中製造所を創設した。この制作所はやがて今日の東芝となった。また、島屋足袋の石橋正二郎はゴム製品の加工に専念して、やがてプリヂストンを創設した。

## V. 筑後川の氾濫の歴史

下の表は、国土交通省の筑後川河川事務所のホームページに載っている筑後川の氾濫を記録した歴史である。大同元年（806）から2001年までの年表である。

1600年代は年に14回（7.1年毎）、1700年代は年に25回（4年毎）、1800年代には45回（2.4年毎）、そして、1900年代（5年毎）には20回（5年毎）平均すると、3.8年毎の氾濫である。

筑後川の氾濫

時代	1600s	1700s	1800s	1900s
氾濫の回数	14	25	45	20

洪水発生年	洪水被害の概要
大同元年 806	太宰府管内、水害と旱魃により田園荒廃。筑後の国1ヶ年田租を免ぜられる。
至徳3年 1384	大洪水。玖珠郡浸水1ヶ月間。溺死者800余人、田畑の損害甚大。
寛文8年5月 1668	大雨洪水。上5郡堤防筋すべて決壊、被害甚大。
延宝8年7月 1680	山汐（山津波）洪水。瀬ノ下町床上2尺余浸水。
元禄15年 1702	霖雨洪水。5月から8月まで洪水32回におよぶ。久留米藩の損耗14万3千石。
享保5年6月 1720	霖雨洪水－生葉郡（耳納山系）山津波、死者61人、損耗10万8千石、家屋流失211戸。又、肥前の損耗14万7千石、家屋の流失116軒。
享保17年5月 1732	大雨洪水。（5月9日）6月より7月にかけて気候不順、蝗発生、飢饉、餓死藩内1万1千余人。
文政9年6月 1826	大風雨洪水、久留米領内浸水家屋6,338戸、死者321人。
嘉永3年6月 1850	大洪水、沿岸田地すべて荒廃、家屋流失、堤防崩壊し、大飢饉を生ず。
明治18年6月 1885	国直轄工事として統一した改修計画（第1期改修計画）策定の契機となった洪水。
明治22年7月 1889	死者日田18人、久留米52人、家屋被害日田8,460戸、久留米48,908戸。第2期改修の必要性を痛感せしめた洪水。（筑後川3大洪水）
大正3年6月 1914	家屋被害5,130戸（中下流）。降雨量で既往の洪水を大きく上回った洪水。
大正10年6月 1921	家屋被害11,620戸（中下流）。第3期改修の契機となった洪水。（筑後川3大洪水）
昭和3年6月 1928	家屋被害14,434戸（中下流）。4大捷水路の開削が促進される契機となった洪水。
昭和10年6月 1935	家屋被害30,858戸（中下流）。中下流型降雨により支川改修着手の契機となった洪水。
昭和16年6月 1941	家屋被害4,235戸（中下流）。
昭和28年6月 1953	死者147人、流出全半壊12,801戸、床上浸水49,201戸、床下浸水46,323戸、破堤等122箇所、被災者数54万人。現在の治水計画の目標となっている洪水。（筑後川3大洪水）
昭和47年7月 1972	床上浸水142戸、床下浸水4,699戸。
昭和54年6月 1979	床上浸水71戸、床下浸水1,355戸。
昭和55年8月 1980	
昭和57年7月 1982	床上浸水244戸、床下浸水3,668戸。
昭和60年6月 1985	床上浸水61戸、床下浸水1,735戸。
昭和60年8月 1985	床上浸水487戸、床下浸水1,517戸（花宗地区床上140戸、床下324戸、寺井地区床上14戸、床下49戸）。台風13号と満潮が重なり下流域で大規模な高潮被害が発生。
平成2年7月 1990	床上浸水937戸、床下浸水12,375戸。下流域の内水被害が甚大で、佐賀江川で激特事業が採択。
平成3年9月 1991	風倒木面積19,000ヘクタール、風倒木本数1,500万本（夜明上流域）。台風17、19号による記録的な烈風により上流山地部で大量の風倒木が発生。
平成5年9月 1993	床上浸水156戸、床下浸水135戸。玖珠川で大きな洪水を記録。
平成13年7月 2001	床上浸水23戸、床下浸水180戸。花月川支川有田川、寒水川で氾濫。

## VI. 近代化と河川環境の破壊

### 《蜂ノ巣城 わが国のダム建設史上最大の反対闘争》

昭和28年の大水害を経験して、国は治水のための「空ダム」を筑後川の上流域に建設することが決定した。梅雨や台風の季節に大量の雨水を蓄えて、河川の流量が減少した時点で放流するという「空ダム」建設の予定であったが、なぜか「空ダム」に適した玖珠川ではなく、落差の大きい大山川での建設が決定された。

これは「空ダム」ではなく、発電用のダムであると訴えた室原知幸たちはダム建設に反対して、ダム建設によって仕事を失う人々と一緒に、ダムの建設予定地の松原地区で立て籠もるために「蜂ノ巣城」を昭和35年4月に建ててダム建設反対の意思を表明した。建設省の土地収容の強制執行を阻止するために大山川沿いの東側の山の斜面に「蜂の巣城」を築いたのである。都会の発展のために、山が荒れ、山の生活が破壊されると訴えたのである。



図4 東南玖珠川、東北花月川、南大山川から三隈川に流れ込む。

しかし、建設省（現国土交通省）の説得と強硬な態度に立て籠もった人々の多くが去って行き、代わって行政の政策に反対するために反対するという人々が反対運動を支援しようと増加してきた。室原智之はこのような事態に危機感を感じて現場での反対運動を法廷闘争による反対運動へと作戦を変更した。10年近い反対闘争の後、昭和45年5月に強制執行の手続きがとられ、蜂の巣城は陥落した。室原知幸の法廷闘争は敗北して下笠・松原ダムの建設が行われた。

このときの事件は、公共事業を行う行政側にも経験は語り継がれている。それは、「土地収容は、

「法」「理」、そして「情」にかなうものでなければならぬ」というものである。この言葉は、いまでも国土交通省（旧建設省）のダム作りの基本理念となっている。

ダム建設で水没したのは、熊本、大分の5つの町と村、483世帯が移転を迫られた。このダムは当初建設省が説明した、常時川に水が流れるはずの洪水調整用の治水ダム（空ダム）ではなく、普段は川に水がほとんど流れない利水と発電を重視した多目的ダムであった。「空ダム」ではなく、常時ダム湖を満水にして、放流時には水は大山川を通らずに大山堰からショート・カットされて最大流量65t/sが柳又発電ダムに流れる計画であったのである。台風シーズンだけは水量調整が必要であり、過剰な降雨の時期には大山川に500t/sの大量の水が流れるダム計画であったのである。

### 《効率の良いダム連携》

筑後川上流の日田市内を流れる川の名は三隈川と呼ばれている。この三隈川に流れ込む南からの大山川と東からの玖珠川一帯は、図3のように、多くのダムが連続的に建設されており、今日、日本有数の効率の良い「ダム連携」の地域である。

玖珠川は流れ込み式のダムが連続しており、観光地の天ヶ瀬温泉地区以外では玖珠川の水量は極めて少ないのが現実である。

大山川には、夜明けダムや女子畑ダムと柳又ダムを含めて6つのダムが連続的に建設されており、効率的なダム連携の場である。

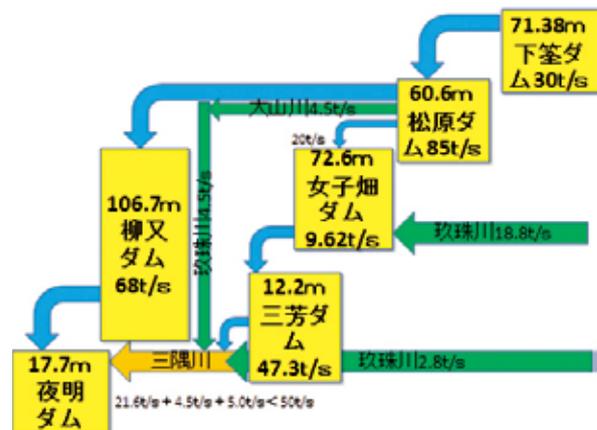


図5 各ダムの能力

大山川の水量は、かつては1.5t/sと極めて少量であったが、15年前の住民たちの「水量増加運動」によって、鮎が育つ夏場は4.5t/s、鮎が産卵のために流下する<sup>8</sup>冬場は3.8t/sの水が大山川

<sup>8</sup>厳密には、夜明けダムの存在のために鮎は下流域に向かって流下することはできない。しかし、将来の可能性を期待してこのように記載している。



## 《鰻の保証》

夜明けダムができて鰻も遡上出来無くなったのである。しかし、鰻に関してはいまだに保証は考慮されていないのである。鰻の養殖のための保障金の意味は、今までと同じ量の鰻が毎年漁獲できる量を保障するのが目的であるはずである。やがて枯渇する鰻のシラスの価格が上昇し始めたのである。鰻のシラスの価格が上昇したのは全国のダム・堰建設、そして、海岸線の護岸虎兇が原因であると考えられているのである。

## VII. むすびにかえて

水は川のものである。川はその川が流れている地域のものである。決して、この川の水をパイパスを通して流用している地域の人のための川が存在するのではないのである。その流域に住んで、日々の生活を営んでいる人々の生活の場である。川は生産手段である。川は、あるときは、生活の糧を得る場である。そして、あるときはレジャーの場であり、癒しの場であり、心のよりどころである。地域の人々の日常生活において川は必要不可欠な存在であった。

川は河川流域の人々の生活を支えてきたのである。歴史の中では川の氾濫が河川流域の人々に大きな被害を与えることも多々あった。しかし、川の氾濫によって、河川流域の人々が川から逃げ出すことはなかった。なぜならば川は彼らの生活に不可欠な水という自然の恵みをもたらすからであった。

ダムと堰の建設は、河川流域の住民からこのような日常の生活の場としての水を奪い、河川環境を奪ったことを理解しなければならない。治水の為ならば許される川の水の減少は限られているはずである。発電のために許される川の水量減少、ダムの存在の為に許される水の汚染は限られているはずである。ダムや堰の存在が河川環境を破壊し、住民の生活の場を奪ってきた歴史的事実を、河川管理者と河川や水の利用者は認識し、水量減少と水質悪化の程度が限られていることを理解すべきである。

一年魚の鮎が、毎年、筑後川下流から一千万匹以上も遡上し、三隈川を越えて、玖珠川や大山川で成長していた鮎がいなくなった。大山川の「響き鮎」は江戸時代でさえも「味よし、姿よし、香りよし」と全国的に有名な鮎であった。また、遠くフィリピンの東の海溝で生まれてはるばる太平

洋を旅して、有明海を北上し、筑後川を遡上した鰻も、今日では筑後大堰と夜明ダムによって遡上を禁じられているのである。

筑後川と三隈川、そして、玖珠川と大山川の自然環境を取り戻すことと発電やその他の利水が両立する河川利用の在り方を考えることが重要なのである。

## 《白州次郎》

「もともと水利は国家の資源である。その資源を利用することによっては、まず、地元の人々、その地方の人々はその恩恵に預かるべしだと信ずる。」<sup>11</sup>

これは、「風の男」と呼ばれた白州次郎の言葉である。この言葉は、白州次郎が東北電力の会長であつた時の言葉である。

## 参考文献

1. 大森彌監修、「一村一品運動20年の記録」、大分県一村一品21推進協議会、平成13年3月
2. 大山町史、「虹を追って」、平成7年3月10日
3. 「大山川再生計画」、大山町森と水のふるさとづくり推進会議、平成11年8月
4. 白虎著、「響き鮎が帰ってくる－大山川の水量増加運動のために－」、2001年11月
5. 拙著、『一村一品運動の経済的帰結－それは一損一貧運動であった』、「グリーンツーリズム」、駄田井・西川芳昭編著、創成社、2003年3月31日
6. 拙著、「一村一品運動の経済的帰結Ⅱ」、産業経済研究（久留米大学産業経済研究会）、第43巻、第2号、2002年
7. 拙著、「一村一品運動の経済的帰結」、産業経済研究（久留米大学産業経済研究会）、第42巻、第3号、2001年
8. 拙著、「防災の経済的評価と社会資本」、久留米大学比較文化研究第25輯、p p. 151～170、2000年

<sup>11</sup>白州次郎著、「プリンシプルのない日本」四十六ページ（メディア総合研究所2001年5月）